

伊勢湾台風被害と洪水多発地帯の防災について

- 輪中と伊勢湾台風について -

輪中地域での伊勢湾台風の被害や今後起こりうる可能性の高い巨大台風に対応する防災について、各研究者や研究機関が、それぞれの見解を出している中、あえて輪中の郷としての伊勢湾台風の被害状況と防災について語りついでいきたいと思う。

1. 輪中地域（特に長島）における伊勢湾台風の被害が起こるまでの状況

各地の講演会で述べられてきたように、伊勢湾最奥の地である長島地域は、海部郡南部や名古屋市南部等の大規模災害の地と同じような被害が生じたことは紛れもない事実である。過去の災害を見ても風水害による被害では最大級のものであることは各種の記録を見れば、その実態が判明する。すなわち 9月21日にマリアナ沖で発生した台風15号は、9月23日には最大勢力の894mb（あえて当時の表現どおりにする）に発達し、日本への上陸を伺う。当時の記録を見れば、まだレーダーもなく、実際に飛行機を飛ばしての観測であったが、1956年（昭和34年）9月26日午前11時にはこの地方に暴風雨警報が発令された。このことは直ぐに各機関や学校などに通達され、これを受けて当時ほとんどの学校が翌日の27日（日曜日）運動会であったため、午後からの準備を取りやめ、子供を帰宅させた。なお、当時の運動会は地域全体での祭りの要素を持ち、稲の収穫前のひと時の休息でもあった。当時のことを記憶する人に聞くと、なぜ急に帰宅させられたかもわからないようで、台風が近づいているような天気ではなかったと言っている。また午後2時頃には少し風が強くなり、その1時間後には堤防に立つと飛ばされそうな風がふきはじめたという。しかし、まだ台風が近づいているような状況ではなく、ラジオなどの情報を聞きながら半信半疑台風の備えをし始めていた。当然ながら当時のラジオは、真空管方式の電源が必要なものがほとんどで、携帯ラジオはあまり普及しておらず、テレビのある家庭もほとんどなかった。ましてや天気図は新聞発表のもので判断するために、情報の伝達は相当遅かったと思われる。また、「伊勢の国の南の入り口には伊勢神宮があり、神様の老家だから、台風＝神風が神のおわすところに来るはずはない」という俗説がまことしやかにささやかれており、実際当時の人々の記憶に残る大型台風は、ほとんどが四国や九州、若しくは太平洋岸や伊勢湾の東を通過する場合が多く、直近の大型台風である13号台風でも大きな被害はなかった。このため、俗説とあいまって明治の三川分流工事後の河道の変更と堤防の強化による洪水の激減から、改修後の堤防は決壊しないという考えが住民に少なからずあったことは確かである。そこで住民が台風対策として取った行動は、雨戸を閉め、その上から戸が風で吹き飛ばないように板や角材を打ち付ける作業を行った。このため台風が近づいてくるとどの家も早めの夕食を雨戸の閉まった電灯の下で済ませた。当時の家は、木造でまだ茅葺（この地方では葦葺）の家も多く、数十センチメートルから数メートル積み上げた土台の上に土台石を置き、その上に柱を載せる在来工法での住宅が多く、洪水時には壁土が流されてしまえば、木と紙だけが残るような構造であった。

当時の事を住民に聞くと午後5時頃には相当に強い風や雨が降っていたそうだが、（ほとんどの家では台風準備で詳しい状況はわからない）青年団活動を催そうとしていた人たちは、まだ翌日に備えて準備を行っていた。午後6時頃にはさらに風雨も強くなり、外へ出られる状況

ではなく、家の中で台風情報に耳を傾けていた。しかし、早いところでは午後6時から7時の段階で停電となり、まだ実際には外はほの明るいはずにも関わらず、暗い屋内で情報もはいらずにたたずんでいた。

この時間帯には既に水防係りや水防団(消防団)など水防に関わる人達は、堤防の見回りを行い始めており、堤防の警戒中のトラックが、堤防を乗り越えてきた高波をかぶったという情報や、既に堤防が決壊しかかっているというような情報が、本部には伝わり始めていた。しかし、本部自体も詳細な情報が伝わらないため、午後7時頃には住民に対しての避難勧告が出されたようであるが、住民に対しての情報伝達の手段もなかったため、自主避難が若干行われた。

2. 輪中地域の水害について

そもそも輪中地域は、洪水の多発地帯であり、洪水と共に生きてきたといっても過言ではない。三年一作、五年一作という言葉が残っているように三年に一度収穫があれば豊作。五年に一度でさえ平作といわれるほど、水には悩まされてきた。しかし、一般にいわれているように水との戦いという考え方は、あまりしない。逆に水を受け入れてきたような認識があるように思える。現在のように木曾三川が完全に分流され、巨大な堤防に囲まれるようになる前。また、河川や堤防などの構築物が法律によって規制される前。破堤による入水は、上流からの肥沃な土砂の流入を意味し、更地効果による豊作が約束されるからである。現在のわれわれと違い、

輪中の生活では、家財道具が豊富にあるような家はほとんどなく、雨風が防げれば後は生活していく食料と農具、舟等があれば十分に生活できた。だから、輪之内町の水防議定書にあるように川の水が五合目までくれば見張り番が立ち、七合目までくると村中の鉦や太鼓が打ち鳴らされ、家財道具が天井裏等へ取り片付けられ、八合目までくれば早鐘は屋太鼓が鳴り響き、成人男性は全員水防小屋へ招集させられた。これが輪中における水防共同体であり、村落におけるコミュニ



ティーとして近年まで活動をしていた。但し、これらの水防活動は、河川の氾濫や河川堤防の決壊を想定しての活動であり、海水、高潮の警戒のための活動ではない。輪中における水害とは、河川堤防の決壊であるため、輪中における下流部からの浸水を想定しているものでなく、上流部からの浸水を想定している。このため堤防が決壊しても、輪中の上流部の堤防の一部分だけが決壊するだけで、堤防そのものはほとんどそのままの状態に残り、実際に調査すれば、輪中の集落はその堤防上に立地する 경우가多く、そのため列状に集落が形成していることが多い。また、上流部の一部の決壊による入水は、輪中独特の地形である上流部が狭く、下流部が低い構造ため、また上流部と下流部の高低差もほとんどないため、いったん輪中内に入水した水は放射状に広がり、流入したときの勢いは徐々に小さくなる。このため輪中には、「堤防が切れたら、堤防へ逃げろ。」という言葉もあるほどで、また、堤防の決壊から自身の家まで、多少

の時間がかかるため「堤防が切れたら、イモを洗え。」という言葉も残っている。これらは河川の増水による堤防の決壊は、堤防上が最も安全であり、水害時に最も大切なものが、食料であり、当座の食料を確保するという意味での「イモを・・・」という言葉ができたものと思われる。また、洪水の時にはすべての戸を開け放して、家の中を水を通したといわれている。これは、当時の家が土台石の上に柱にのっているだけのため、戸を閉めておけば、洪水時の水流によって家自体が流失してしまうからであり、前述の七合目まで水が来ると家財道具を片付けるというのも、このためである。但し、浄土真宗の門徒が多数を占めるこの地域では、仏壇に対しては他地域よりも多くの費用を掛けるため、(一説には家と仏壇は同じ費用といわれている)重く大きな仏壇は、天井の上に大きな梁に滑車を付け、天井裏まで引き上げるような構造になっている家屋も多数存在していた。実際その後の聞き取りでは、伊勢湾台風の際には北部地区においては、その作業が行われており、水の浸入の勢いも関わるが、昔からの構造がそのまま生かされている。また、長島でも中部地域以北では江戸期から続く、水屋という水害時の避難場所を個々で持つ習慣もあり、堤防際以外で直接の水の浸入がなかったところは、水屋に逃れることによって助かったという記録も残っている。江戸期には東の木曾川堤防と西の揖斐川堤防(当時は長良川は木曾川と上流で合流)結ぶ堤内地の堤防が造られ、長島の上郷と下郷に分けられ、どこが破堤しても上下のどちらかが水害からは免れるという政策が取られた。

3. 輪中地域(特に長島)における被害の状況

記録などを見ると、この地域での最初の破堤は、桑名市の城南地区と思われる。ここは、明治期の分流工事によって干拓された地区であり、揖斐川の最下流にあたる地区である。昔から4刻、8刻、12刻という言葉があり、揖斐川では長島での雨の降り始めから8時間後、長良川では16時間後、木曾川では24時間後に河川の増水が見られるという意味であるが、これは河川の流域面積と同時に河川の高さにも関連し、揖斐川が最も低い位置を流れることから、伊勢湾台風時にも揖斐川からの増水が高潮の影響を受けて破堤に結びついたものと考えられる。時刻は午後7時30分から8時の間と思われる。しかし、この頃には既に電気は止まっており、真っ暗の中での災害であったため正確な時刻はわからない。このため、長島での決壊は揖斐川沿いの海岸堤防から始まるが、時刻は午後8時前後といわれている。またその後、午後9時頃までに名古屋市南部や木曾岬村の堤防が破堤している。

そこで長島の堤防の破堤と被害について大まかな考察をしてみると、最初に決壊したのが、揖斐川沿いの松蔭地区の堤防であり、若干の間をおいて長島海岸の海外堤防2箇所が決壊。この三箇所の決壊から入り込んだ高潮は、松蔭地区の中部の旧輪中堤防と木曾川堤防が交わるところに向かって下流から上流に向かい、一点に水勢を集中させていったものと思われる。そのため、松蔭中地区の東部と松蔭東地区では大量の海水が一気に押し寄せきて、家屋をその



ままの状態の木曾川堤防を越えて流れ出したといわれている。またその一部の水勢は北隣の横

満蔵輪中に流れ込み、白鷄地区の揖斐川堤が破堤した水と共にこの地区の北端に押し寄せ、またそのほかの破堤したところから入った水と共に旧青鷲川の堤防上の福吉の集落に襲い掛かったと思われる。つまり下流から入った水が、木曾川堤にぶつかりながら新たに破堤して入ってきた水と共に北辺・北辺へと集落を押しつぶしながら北上していった。また、揖斐川及び長良川の堤防が各所で決壊し、下流からの浸水と共にその勢いを増し、決壊の直撃を受けたところは当然のごとく家屋ともども流されてしまい、高潮による決壊によって浸水してきた海水は、旧輪中の東北隅へ向かって収斂化現象を起こし、濁流となって押し寄せた。当時、長良川の警戒に当たっていた水防団や水防の係りは、当時の様子を盛り上がった海が自分のほうに向かって落ちてきたというような表現であらわしていたり、堤防を警戒していたため自分の南北で堤防が決壊したために、その場所に取り残されてしまったというような話をしている。また、当時としては珍しかったトラックで見回りをしていた人は、破堤前にもかかわらず、堤防のあちらこちらでトラックの腹をこすったといているので、破堤を免れたところでも相当に堤防が削られていたということがわかる。特に河川堤防のように護岸がコンクリートで被覆されていないところではこの傾向が顕著であった。

午後 8 時前後から決壊を始めた堤防は、伊勢大橋南の決壊を持っていったん収束する。このため、当時コンクリート舗装され始めた国道一号線で決壊で生じた浸水の速度がいったん収まるが、国道一号線を乗り越えた浸水と伊勢大橋の南の決壊箇所からの浸水によって、旧の長島城下の商店街も大きな打撃を受けている。しかし、これらの浸水も当時の国鉄と近鉄によって勢いが弱められた。これは、鉄道の盛り土が、かつての井桁（東西の堤防を結ぶ堤内地の堤防）



と同じような堤防の役割を果たしたといわれている。しかし、このために破堤による浸水が止まったわけではなく、近鉄と国鉄を乗り越えて長島の北部地区にも浸水していった。国道一号



線以北での破堤がなかったため、長島の北部地域では場所にもよるが、浸水の時刻は午後 10 時ごろだったというところもある。これは、当日の満潮が午後 0 時ごろということもあり、破堤による浸水がいったん収まり、満潮の前の上げ潮と台風の最接近後の台風に向かって吹き込む海水の吸い込み現象によって、引き起こされたものと思われる。このためこの地区では他地域と比べ物にならないほど少ない人的被害であり、浸水そのものも翌朝夜が明けるまで知ら

なかったという証言もある。もともと北に高く、南に低い、東に高く、西に低い地形である

ことから当時の長島の北端では海拔は 0 メートル以上であり、集落の形成が、旧の輪中の堤防に立地し、その上、基壇に土盛りもしくは石垣を積んでいる家屋が多く、床下浸水で済んだところもあった。また、最北端の集落は、明治時代の河川改修前は木曾川の堤防上にあった集落であったため、集落が立地する地面の海拔が 4 メートル近くも有り、屋敷に対しての浸水すらなかった。このように同じ長島で有りながら、被害の状況も時刻も各集落ごとで、極端に言えば隣同士でさえその状況は大きく変わっていることをあわせて付け加えたい。

< 中部地方を通過した主な台風規模 >

台風名	上陸年月日	上陸地点	上陸地点付近観測所			
			観測所名	最低気圧	瞬間最大風速	最大風速
室戸	S9.9.21	室戸岬	室戸岬	911.9 ^{mb}	60.0 m/s	45.0 m/s
枕崎	S20.9.17	枕崎	枕崎	916.6	62.7	40.0
13号	S28.9.25	尾鷲	潮岬	947.9	41.7	29.1
狩野川	S33.9.26	大船	長津呂	955.5	46.3	37.8
伊勢湾	S34.9.26	潮岬西	潮岬	929.5	48.5	33.4
第2室戸	S36.9.16	室戸岬	室戸岬	930.7	84.5	66.7

< 「台風経路図30年表」(日本気象協会)資料による >

< 被害状況 >

台風名	地域	死者、行方不明者数	負傷数	全壊	半壊	流失	床上浸水	床下浸水	
室戸	全国	3,066		(92,629棟)			(225,948)棟	(170,863)棟	備考
枕崎	"	3,756	2,452	(69,520棟)	(69,448棟)	(4,364棟)	(149,495)棟	(154,070)棟	()は非住家含む
13号	"	478	2,559	5,989戸	17,467戸	2,615戸	144,300戸	351,575戸	
狩野川	関東、東北 甲信越	1,269	1,138	1,289戸	2,175戸	829戸	132,227戸	389,488戸	
伊勢湾	全国	5,098	38,921	16,135戸	113,052戸	4,703戸	157,858戸	205,753戸	
第2室戸	全国	202	4,972	14,681戸	46,662戸	557戸	123,103戸	261,017戸	

< 「台風経路図30年表」(日本気象協会)資料による >

本町の被害状況

	北部地区	中部地区	伊普島地区	合計
人口	1,290	5,139	2,279	8,708
世帯数	246	1,039	389	1,674
死者	1	101	281	383
全壊	4	130	96	230
半壊	65	408	109	582
倒壊	0	3	10	13
流失	0	78	168	246
床上浸水	40	158	3	201
床下浸水	77	82	0	159
無被害	60	180	3	243
全滅戸数	0	9	13	22

4. 輪中地域（特に長島）における復興状況

突然の襲来であった伊勢湾台風は、堤防の決壊時から復興は始まっていたといっても過言ではないが、実際に被害に遭われた方に聞くと、襲来から1日から2日ほどの記憶があいまいである。どこでどうしていたのか、例えば何を食べたのか、どこの水を飲んだのか、どこで寝たのかなど具体的な行動がわからない人が多く、また家族や親戚などを探し回っていた方や他所にまで流れて行った方なども具体的な記憶に欠ける方が多い。新聞等のマスコミ報道も伊勢湾台風の翌日は、航空写真などでの報道があったものの、大きな被害があった模様としか報じていない。長島の南部地域の方の聞き取りによると、当時は水路が多かったため、もともと道路整備は進んでおらず、堤防が生活道路として使われていたため、寸断された堤防では救援物資が到着するまでには数日を要したと言っている。3日目ようやく新聞社のヘリコプターが低空で撮影に来たとき、カンパン類を落としていってもらい、まず子供たちに食べさせたことを鮮明に覚えているという。水は近くの水をすくって飲んだが、塩辛くてとても飲めなかったと言っている。しかし水なしでは生きていけないので、その当時使われていた井戸水を飲んだものと思われる。また、名古屋方面からの物資の輸送は、国道1号線が寸断されていたこともあって、伊勢大橋は通行できたので、桑名方面から救援物資が入ってきて、大量に橋のたもとに置かれていたという記憶を残している人もいる。そのときの脱脂粉乳の味が忘れられないという人もいる。

被害を受けた各家庭が、復旧に取り掛かる頃には、既に役場内では町内の復旧と生活弱者である子供や老人のことについて話し合いが始まっていた。つまり、水害で最も警戒を必要とするのが、感染症である。新鮮な水と食べ物が乏しく生活の拠点である住居が使えないところが多く、そのため、子供と老人を早急に安全なところへ移送する必要があると判断している。関係機関

や県などとの協議の末10月2日から、幼児から全小中学生が、ヘリコプターや陸路ではトラックを使い、揖斐川対岸の桑名市の堤防からは上陸用の舟艇で鈴鹿市の電通学園始め、伊勢の旅館等に疎開した。その後は三重大学の水産学部や三重県楠町などに移動している。最も被害の軽微だった北部小学校は、11月8日に中部小学校は11月13日に、最も被害の大きかった伊曾島小学校は12月5日に疎開先より帰宅している。幼児や老人については詳細は不明だが、最初には伊曾島小学校と同じく鈴鹿市の電通学園に入ったと思われる。

災害復旧は、県下はもとより各地の消防団や自衛隊のもと行われていくが、この当時には既にボランティアの活動も行われており、流木の整理や壊れた家屋の後片付け、救援物資の配給などに多くの人携わった。堤防の改修工事はトラックやショベルカーなどももちろん使われたが、昔から堤防修理は「ただ役」という風習がある土地柄のため多くの地元の方が復旧作業に人力を提供した。実際締め切り箇所には、土嚢袋を担ぎ運ぶという作業や大量の土砂を必要としたために堤防に仮設のレールを敷き、トロッコを押して運ぶということも行われた。

北部地域においては、11月10日頃までに水は引いていったが、中部地区では11月20日頃までかかり、南部の伊曾島地域においては最大の決壊箇所である松蔭地区白鷄で11月18日に締切が完了した。しかし、この地区の排水にはこのあとも2ヶ月近くの日数を要したため、完全排水となったのは翌年の1月のことである。各地区の排水と並行して、堤防の本格的な復旧工事が始まるが、伊勢大橋以南の長良川と揖斐川堤は、以前の藪堤防と呼ばれる撒き石と糞土による土堤からコンクリートの三面張りの堤防と変化していくのである。南部地域の堤防に関しても同様であるが、伊勢大橋以北の長良川堤防と中部・北部地区の木曾川堤防は以前の藪堤防ではないものの土堤のままで残ったが、広く高水敷を取るようになった。

5. 輪中地域（特に長島）における現状

平成21年4月現在、長島においては、住民の半数以上が伊勢湾台風経験者ではなくなってしまっている。同年に調査したアンケートでも堤防が高潮などで決壊すると思っている住民は70%にのぼっているが、自宅に滞在できるとしている人は60パーセント近くいる。一見矛盾しているように見え、破堤が常に長島全域の浸水を表しているように見えるが、伊勢湾台風時でも当時の写真を見るからには全域が水没しており、全戸が浸水しているように見える。しかし、実際に調査していくと30%ほどの家屋は浸水していないことがわかる。これは特に北部地区にいえることだが、輪中の集落は現在の堤防ではなく、昔の堤防上（旧輪中堤）の上に立地していることが多く、田面よりもともと1~2mほど高いところにあり、明治以降には土砂の搬入が比較的容易になり、母屋自体のかさ上げが始まり、昔の堤防上に立地しているにもかかわらず、そこから2~3m近く石垣を積んでいる。ましてや最北端の集落は明治期まで木曾川の堤防上に立地した集落であるため、伊勢湾台風時には床下までの浸水すらなかった。これらから、破堤による高潮の直撃を受けていない集落では、直接的な家屋に対しての被害を見ないところもある。そこで輪中地域における現状は、昭和の終わりから平成にかけての堤防の強化と共に行政指導による無線設備等の整備により、輪中という地域の特性もあつたことながら、伊勢湾台風前と同じような様相を呈していると思われる。すなわち、伊勢湾台風前は明治の河川改修後、60年間に渡り

洪水はなくラジオや無線が発達し始め、水防法による行政指導型の水防が始まった時期である。現在もまた、団地集落を除く一戸建てのほとんどは、石垣を高く積み上げており、前述したとおり、堤防の改修工事が終わりつつある。そして、伊勢湾台風以降50年間も破堤もなく、他地域に見られるゲリラ豪雨的な集中豪雨も大きな被害もなく、現在に至っている。

決して決壊しない堤防はないけれど、可能性がある限り、警戒は必要であり、防災無線網が完備したとはいえ、いかなる状況になるかはわからない。このためいろいろな状況を仮定し、そのための対策をとることは、何時の時代になっても必要である。

6. 輪中地域における人命と防災について（逃げる避難と逃げない避難）

過去において、輪中地域の洪水については前述したとおりだが、古文書の記録を見ると輪中は洪水の歴史といっても過言ではない。多くの人命が奪われたり、生活の糧である農耕地がなくなったりしている。小輪中や新田輪中では、完成すればなくなり、再び土砂の堆積が始まると輪中を作る繰り返しで、古地図などにも亡所という文字が頻繁に出現する。堤防の決壊を阻止するためには、決死隊という言葉が今でも残っており、古老などに聞くと、洪水時には米俵を抱えて堤防の決壊口に向かって飛び込んでいった若い衆もいたという。命の価値は決して軽いわけではないが、現在の価値観とは違っていたことは確かであるし、土嚢ではなく米俵というところに輪中としての土の大切さ、（長島には土一升は金一升という口伝がある）土の重要性を物語っている。

そこで、伊勢湾台風をふりかえってみると、当時の長島の人口が8000人あまりでなくなった方が383人である。数字を見ると当時の人口の5%近くの人が亡くなったわけで、その数字の持つ意味は非常に大きい。しかし、被災された方の話を聞いていると、本当に分析しなければならないのは、この残りの95%以上の方が助かったことに大きな意味があると思われる。当時の長島の全景を写した航空写真や、俯瞰の写真を見ると、全域が水没しているように見える。実際に全域が浸水しているわけではあるが、その中で、95%以上が助かったのはどうしてか、それらを今後分析していく必要はあるだろうと思う。体験者から聞いた話の中でも印象に残っているのが、板切れ一枚あれば助かっていたのにと話である。体験者の中には浸水した水に流されながらも木に掴まって助かったという話は多く聞かれる。洪水時には泳ぐということは不可能に近い、それでは、何かに掴まればよいということになるが、現在ならばライフジャケットでもあれば、多くに命が助かったのではないが、近年避難途中で水路に流されて命を落とす人もあるが、そのときにはライフジャケットを着ていれば、多くの命が救われたに違いない。また、長島でも北部地域には無被害の家もあった。これは、集落自体が旧輪中の堤防上に立地し、その上、1~3mもの石垣を積んだ上に建っている家も数多くあり、情報が途絶えてから翌日の朝まで、長島が全域浸水していたことを知らなかったところもあった。これも現在に当てはめると、必ずしもすべての家が避難するということには結びつかないように思える。台風等で風雨が激しくなってきたからの非難に対しては、そのときの気象や実際の家屋の立地の状態や高さなどを考慮しなければならない。近年では、堤防の高さ近くまで石垣を積んでその上に2階~3階建ての家を建てている所もあり、個々の条件によっていろいろな方法があるように思える。また、伊勢湾台風時には国道一号線や鉄道によって水勢が弱められたこ

とから、何らかの障害物があれば、被害の縮小は図れると思われる。「長島町史」や「輪中と伊勢湾台風」の著者である伊藤重信氏の言われるように旧輪中堤を残すことも大切ではあるが、実際の生活を考えると今以上の高い堤防内での堤防を構築または維持することは困難である。その代替として、例えば鉄道のかさ上げも可能かもしれないし、一般道や高速道路の高架部分を開閉式の堤防として利用することも考えられる。

気象予報が発達してきた現在においては、台風の進路や勢力の予報はかなり正確なものになってきている。このため巨大台風が接近するかなり前には、正確な情報が入手できると思われる。この情報を元に判断し、安全な場所に避難することができれば、少なくとも人的な被害はない。しかし、伊勢湾台風から50年が過ぎ、上記のアンケートのように堤防が決壊しないと思っている住民にとっては、早期の避難は難しいものである。では、早期の避難を逃した人々にとっては、単純に避難場所に逃げるということが正解かどうかは、難しい。風雨が強くなってからの非難はかえって危険であるし、大量の雨が降る中での非難は、小河川や水路なども見えなくなり、流されてしまう可能性は高い。つまり、その場その時によって、逃げる避難と逃げない避難を考える必要があると思う。

また、近年、ハザードマップなど日ごろから防災に関する情報が、数多く出されている。しかしこれらは、地図上の高低差などで平面的に捕らえている。このため、大きな建造物の陰であったり、堤防近くであったりすると、単純に避難マップとしての様相を呈しない。伊勢湾台風で、隣同士でもまったく違う被害があったように、個々の住居での個人のハザードマップが必要となってくる。例えば、川の洪水と海からの洪水では、浸水の方法はまったく違うし、今回は洪水を中心に述べてきたが、災害はそれだけではなく、地震であったり、土石流であったりする。このため益々正確な情報を得ることが大切で、電気が止まることで伊勢湾台風時の真っ暗で目隠しをされたようになる状況だけは避けなければならない。そして情報を精選し、古今ハザードマップによる的確な判断をし、まず生命の安全を確保し、完全に災害を無くすことはできないものの少なくする努力を行っていかなければならない。

伊勢湾台風の時のごとの経過(1) 木曾川下流工事事務所の記録より

- 7時20分
風雨注意報発令
- 11時15分
暴風雨警報・高潮警報・波浪警報が名古屋地方気象台より発令
名古屋港の満潮(27日0時45分)による高潮の発生を警告
- 11時30分
三重県に高潮・波浪警報
- 11時50分
岐阜県に風雨・洪水注意報
- 14時50分
室戸岬の南方約200kmに接近。東海地方の海岸部で秒速20メートルの強風
- 16時00分
三重県と愛知県が暴風圏に入る。
- 18時00分
三重県に洪水警報
- 18時15分
潮岬付近に上陸。東海地方に秒速30mの強風。愛知県に洪水警報
- 18時30分
岐阜県に洪水警報

伊勢湾台風の時のごとの経過(2) 木曾川下流工事事務所の記録より

- 19時00分
尾鷲の西南西50キロメートルの地点。ところにより秒速40メートルの突風。
- 19時00分～20時00分
桑名市で破堤が続く
- 20時00分
津の南西約60kmの地点
- 20時00分～20時30分
長島南部の堤防が次々と破堤
- 20時30分～21時00分
名古屋市南部の堤防が次々と破堤
- 20時40分頃
木曾岬村(当時)の堤防が次々と破堤、その他の地区でも破堤が続く
- 21時24分
名古屋で最低気圧を測定
- 21時30分
名古屋の西約30kmの地点
- 23時00分
揖斐川に洪水警報
- 27日00時30分
長良川に洪水警報
- 1時40分
台風は富山沖に。木曾川に洪水注意報